



報告

平成 19 年度論文賞の 受賞論文紹介

編集にあたって



坂井 修一

論文賞委員会選考委員長

東京大学大学院情報理工学系研究科

昨年度より、論文賞の紹介記事を機関誌「情報処理」に掲載することになりました。最新の研究成果の中で、最も価値が高いと評価されたものについて、1ページの紙数で著者自らに語っていただきたい、研究成果について広く会員の皆様に披露するとともに、このような研究を行うに至った経緯や苦労について述べていただきたい、というのが趣旨です。

学会員の多くが、ご自分の専門に近い研究分野の動向には注目していても、少し離れた分野については無関心であるか、関心はあっても解説記事以外のものは読まない、論文誌などはなかなか手が出ないというのが実情かと思えます。これは、情報学という学問分野が短い期間に大きく発展し、それぞれの論文の内容が専門領域に深く分け入ったものになったからと考えられます。たしかに学会の対象とする学問・技術の世界の発展と成熟を示す現象ではありますが、見方を変えれば情報学の内部の分野構成が固まってしまう、分野間の交流や協調が乏しくなることにもつながりかねません。論文賞を学会誌で披露するという企画の背景には、そういう危惧もありました。

私どもが学生のころは、情報系の諸分野の間の垣根はとて低いものでした。ハードもソフトもアプリも、メディアもネットワークも、ロボットも基礎数学も、グラフ理論もグラフィクスも、皆が一堂に会してわいわいがやがや議論したものです。どの分野もすでに黎明期は過ぎていましたが、可能性という香気に満ちていました。それが今では、学問は進み、技術は進んで、香気は失われようとしているようです。これではいけません。若者よ、このページの以下の部分はどうでもいいから、次のページからの10ページを真剣に読んでほしい。そして、

面白そうなものがあれば、どんどんと越境して挑戦せよ。そういうことを言ってみたくっております。

*

平成19年度論文賞の対象となった論文は、平成18年10月から平成19年9月までの間に論文誌ジャーナルと論文誌トランザクションに掲載された論文全554件です。その中から、厳正な審査を経て10編の論文を選出しました。以下、審査過程の概略を記します。

第1回論文賞委員会は、平成19年9月3日に開催され、論文賞選考規則を確認し、本年度の選考方針を決め、選考にあたる論文賞委員を5つのグループに分けました。その後、査読者・一般会員などからの推薦を受け付け、集計した後に、第2回論文賞委員会(平成20年2月5日開催)において、最終候補37編を選定いたしました。さらに第3回委員会(平成20年3月4日開催)において、最終的に10編が賞に決定いたしました。

なお、論文賞の選考方法は、来年度から大きく変わります。すなわち、論文誌(ジャーナル、トランザクション)ごとに論文賞委員会が作られ、それぞれ独自に賞の選定をすることとなりました。この点について、詳細はWWWなどに掲載されると思います。

今回論文賞に選ばれた皆様、本当におめでとうございます。これを弾みとして、ますます精進され、次なるより高い目標に向かわれることを、選考に携わった者として、心から念じております。また、今回惜しくも選から漏れた皆様(=受賞論文以外のすべての論文の著者の皆様)には、来期を期して、よりいっそう励んでいただきたいと願っています。

(平成20年4月4日)